

楚歌の話

植 田 渥 雄

1 垓下の歌

今回は楚歌の話をしましょう。敵に包囲されて動きが取れなくなった状態を「四面楚歌」といいますが、この四字熟語はどこから来たのでしょうか。

中国全土をはじめて統一した秦の始皇帝は、その強大な軍事力と独自の法体系を背景に、永遠の帝国を目指して、徹底した強圧政治を行います。ところが始皇帝が没すると、各地から農民や兵士たちの蜂起が相継ぎ、その壮大な夢は二代にして、もろくも潰え去ってしまいました。

再び訪れた戦乱の中で、最後に勝ち残ったのは、楚の国の貴族出身の項羽と、はい沛（今の江蘇省北端）の平民から成り上がった劉邦でした。

項羽は、その優れた武勇と、けた外れに強大な兵力で、全土制覇まであと一歩と迫りますが、自らの武勇に溺れて部下の信頼を失い、離反する部将が相継ぎ、あげくの果ては最初劣勢であった劉邦の軍にがいか垓下の地で包囲されてしまいます。劉邦は包囲した自軍の兵士たちに楚の国の歌を歌わせました。それを聞いた項羽は故国の楚の地まで劉邦の手に落ちたと錯覚し、敵陣の中で最後の武勇を振るった末に、愛妾の虞姫とともに自刃して果てました。これが「四面楚歌」の由来です。

劉邦が兵士に歌わせた楚歌が実際どのようなものであったか、記録にないので分かりませんが、このとき項羽が残したとされる歌が司馬遷の『史記』項羽本紀に採録されています。この歌は後世「垓下歌」として親しまれてきました。形の上からみて楚歌の特徴がよく表れた歌なので、先ず手始めにこの歌を採り上げて

みましょう。項羽と虞姫の物語は日本でも昔からおなじみですが、中国でも、もちろんよく知られた話です。有名な京劇の出し物『霸王別姫』では、劇中でこの歌がうたわれます。

力拔山兮氣蓋世	ちから 山を抜き、気は世を ^{おほ} 蓋ふ
時不利兮騅不逝	時に利あらず、騅 ^{すい} 逝 ^ゆ かず
騅不逝兮可奈何	騅 逝かず、奈何 ^{い かん} すべき
虞兮虞兮奈若何	ぐ 虞や、虞や、若 ^{なんじ} を奈何せん

「垓下」とは、今の安徽省^{あんきしやうれいへき}靈璧県の東南にあった古い地名で、蚌埠市の北方約70キロの地点にあります。古地図でみると淮河^{わい が}の北岸に位置しています。「力拔山」は山を抜き取るほどの力があること、「氣蓋世」は世界を覆い尽くすほどの気概がある、という意味で、項羽がたぐいまれな武勇を自ら誇っていたことを表す言葉です。この句の中間をつなぐ「兮」の字は、語気を表す助辞で、楚歌や、あとで触れますが『楚辞』などでは特に多用される文字です。ご覧になれば一目でお分かりのように、この歌でもこの文字が多用されています。漢代では「辞」とか「賦」とかと称する詩文のジャンルでこの文字がよく使われました。後世では、古風な感じを表す修辞としてたまに使われました。例えば晋代の詩人陶淵明の「帰去来の辞」では出だしの一句「帰去来兮」（帰りなんいざ）にこの字が使われています。格別の意味はありませんが、語句の切れ目にこの字を置くと、どこことなく古風な感じがします。現代中国語の音では、「シー」と読みますが、当時の音では感嘆の意を込めて、「ハァー」と発音されていたものと推定されています。「時不利」は時の運に恵まれぬこと。ここで項羽は、戦いに敗れたのは自分のせいではなく、ただ運に恵まれなかっただけだと言っているのです。たぐいまれなる武勇にもかかわらず、己を顧みる自省能力を持たない項羽の性格が、いみじくもこの一句によく表れています。「騅^{すい}」は、あしげの馬。白と黒のまだら

馬のことで、ここでは項羽の愛馬のことです。「逝」は行く。進む。「可奈何」は、如何にすべきか、「奈何」は「如何」と同じで、この時代によく使われた疑問詞です。ここでは、これまで百戦百勝を誇ってきた項羽が、初の大敗を喫して途方に暮れる気持ちを表しています。「虞」は虞姫。虞美人。項羽の愛妾の名で、絶世の美女であったと伝えられています。晩春の頃、街路樹のわき等でオレンジ色を帯びたピンク色の可憐な花を咲かせるヒナゲシを見かけた方も多いかと思いますが、ヒナゲシはまたの名を虞美人草ともいい、その名はこれに由来しています。「奈若何」は、お前のことをどうしよう、という意味です。「若」は「汝」と同じく第二人称を表す代名詞で、やはりこの時代によく使われました。「奈」と「何」の間に代名詞の目的語が入るのも、この時代特有の語法です。

項羽は、一方では罪もない民衆を大量に虐殺し、功績のあった有能な部下を、ただ戦略上の意見が合わないという理由だけで容赦なく放逐するという、極めて残忍な性格の持ち主でしたが、他方では、死に臨んで、これまで無言で付き従ってきた愛馬と愛妾の身を案じるという、いわば子供じみた純粋さを兼ね備えていました。このような純粋さは文学の世界で見ると分には魅力的ですが、現実では往々にして身勝手さを伴います。そしてこのような純粋さと身勝手さこそが残忍さにつながるものと言ってよいでしょう。『史記』の著者司馬遷は、このような自省の心を持たない子供じみた身勝手さを、「身は東城に死すとも、なお覚寤かくごせずして自責じせきせざるは過あやまれるなり」と言って痛烈に批判しています。

〔訳〕 山をも抜かん、この力。世をも覆おおはん、この気概。されど時の利、我になく、進むすべなし、我が愛馬。進むすべなし、我が愛馬。そも行く末を如何にせん。あはれ、愛しき虞美人よ、さても汝なれをば如何にせん。

2 楚辞と楚歌

さてここで楚辞について一言触れておきましょう。楚は長江の中流域から下流域にかけて広がる広大な地域で、戦国時代にはこの広大な地域を支配する強大な国家が存在していました。これがいわゆる「^{そのくに}楚国」です。しかしこのころの長江は今と違って、河川と陸地の境界線がはっきりしない、果てしなく広がる湿地帯でした。流域には大木が生い茂り、交通も極めて不便でした。猛獣や毒蛇、病魔の横行する土地でもありました。したがって太古の時代においてすでに高度な文明を築き上げた黄河流域の人たちからは、未開の地として見下されていましたが、実際には北方とは趣を異にした独自の文化が栄えていました。詩歌の面でも際立った特徴がみられます。その代表格が屈原（BC343? — BC283?）の残した名作『楚辞』です。

楚辞は楚歌と同様、長江流域に発生した文芸形式です。屈原は楚の国の王家につながる名門貴族の一人でした。国の安泰を図るため、斉の国と組んで西方の強国秦に対抗しようとする、いわゆる「合従」の政策を主張しましたが、時の王室に受け入れられず、逆に楚の懐王の側近たちの讒言に遭って国を追われ、最後は絶望の末に汨羅江に身を投じて果てました。追放されてから没するまでの間、屈原は各地を放浪しながら、憂国の思いを「辞」という、楚の地特有の文芸形式に託して歌いあげました。これを後世の人が集録したのが『楚辞』と呼ばれる詩文集です。したがって一般に楚辞といえば、この詩文集を指す固有名詞です。『楚辞』は漢代になって成立したもので、屈原以外の人の作品も収録されていますが、その中心部分は屈原の作品で占められています。

屈原という人物については、中国では命を賭して国を守ろうとした悲劇の憂国詩人として今でも多くの人々の尊敬を集めています。現代作家郭沫若は1942年、当時の国民党支配地区の弾圧に対する抗議の意を歴史劇に託した『屈原』という題名の劇作を書き、1960年代に日本でも上演されて話題になったことがあります。

す。そればかりでなく屈原の名は日本でも古くから知られていました。中国ではもちろん、日本でも五月五日の端午の節句に粽^{ちまき}を食べる風習がありますが、旧暦の五月五日は屈原の命日とされている日です。したがってこの日は屈原を偲ぶ日として始まったものです。なぜ粽を食べるかという、これには興味深いエピソードが伝えられています。水死した屈原の体を魚が食べてしまうのを恐れた当時の民衆が、その死体を魚に食べられなくて済むように、魚の餌として竹の筒に米を入れて川に投げ込んだ、これが粽の由来だというものです。実際そのようなことがあったかどうかはともかくとして、この一事を見ても、後世の人々がいかに屈原の名とその遺徳を慕っていたかが分ろうというものです。なおこの話には後世さまざまな尾ひれがついて語り継がれていますが、ここでは省略します。

さて、話をもとに戻しましょう。楚辞という文芸形式の由来については諸説があっただけにまだにはっきりしませんが、北方の黄河流域の文化を代表する『詩経』に見られるような、写实的性格を多分に備えた一般の中国古代詩歌の中であって、特に神秘的、幻想的性格が強く、同時に神話的な色彩をも備えています。このことから、当時における南方土着の宗教行事にかかわるものであったとする説が有力です。

『楚辞』に収録された詩篇はかなり長いものが多いので、全篇を丸ごと紹介することは時間の関係上できませんが、ごく一部分だけを覗いてみましょう。

君不行兮夷猶	君 ^{すす} 行まずして ^{いいう} 夷猶す
蹇誰留兮中洲	^{ああ} 蹇 ^{たれ} 誰か ^{ちうしう} 中洲に ^{とど} 留む
美要眇兮宜修	^び 美 ^{えうべう} 要眇として ^{ぎしう} 宜修し
沛吾乘兮桂舟	^{はい} 沛として ^{われ} 吾 ^{けいしう} 桂舟に乗り
令沅湘兮無波	^{げんしゃう} 沅湘をして ^{なみだ} 波 ^{なみだ} 無からしめ
使江水兮安流	^{かうすい} 江水をして ^{あんりう} 安流せしめん

望夫君兮未来 夫君を望めど 未だ来らず
 吹參差兮誰思 參差を吹いて 誰をか思ふ

これは『楚辞』九歌・湘君の中の出だしの一節で、神話的な色彩が強いとされているものの一つです。おそらく、男神が恋する女神を待ち焦がれるさまを歌ったものと思われます。逐語的に解釈すると煩雑になるので、訳と注釈だけを示しておきましょう。後でゆっくり読んでいただければ幸いです。

余談になりますが、今から 30 年前、初めて中国を訪れた折、湘江のほとりに立って、果てしなく広がる川面をぼんやりと眺めていると、この詩句が切々と胸に迫ってきたのを今でも時々思い起こします。近代化の進む今日、果たしてこのような感慨にふけることができるのかどうか、いささか不安になりますが…。

[訳] 留まりしまま、君は来ませず。ああ、誰がために中洲に御座す。美しく、身を繕ひて、桂の舟にて、我 急ぎ行き、沅湘に、波 無からしめ、江水の、流れ静めん。待ち望めども、君は来ませず。誰をか思ふて、簫 吹き坐す。

[注釈] 九歌：『楚辞』の中の篇名 湘君：湘江の水神 夷猶：立ち止まったまま動かないこと 蹇：ああ（感嘆詞） 美要眇：美しいさま。 宜修：着飾ること 沛：船足の速いさま 桂舟：桂の木で作った船 沅湘：沅江と湘江（いずれも川の名） 江水：川の流れ（おもに長江を指す） 參差：簫（管楽器の一種）の別名

原詩を一目見ればお分かりのように、句の前半と後半の間に整然と「兮」の字が並んでいます。これは句の前半で感情を高揚させたあと、中間で一度呼吸を整え、やや気持ちを抑えながら、緩やかに力強く後半へ移行するというリズム構成になっているものと見ることができます。三言—兮—二言、つまり、タン・タン・

タン・ハァ・タン・タン、という風なリズム、これが楚辞の持つ基本的なリズムです。

これを先に採り上げた「垓下歌」の一節「力拔山兮氣蓋世」と比較してみますと、こちらの方は、三言一兮一三言、つまり、タン・タン・タン・ハァ・タン・タン・タン、となっています。後半の部分に一字が加わりますが、基本的には似通ったリズム構成になっています。これと同じリズムは『楚辞』の詩句の中にも見ることができます。このほかにも『楚辞』には変化に富んだリズムが現れますが、そのことについては、時間があれば後で触れることにしましょう。ここで申し上げたいのは、楚辞も楚歌も共通の文化的土壌、つまり長江流域を中心とした南方文化の土壌に生まれたものであるということです。

これに対して北方黄河流域の文化風土から生まれた『詩経』は、四言を中心とした、タン・タン・タン・タン、という比較的単調なリズムで構成されています。この単調さを補うための音韻上の工夫も見られますが、『詩経』についてはこの点をも含めて前回お話ししましたので、今回は省略します。（本誌第五集参照）ただ両者を比較すると、それぞれの特徴をはっきり見て取ることができると思いますので、後でゆっくり比較してみてください。

3 たいふうのうた 大風歌

さて楚辞の話はそれくらいにして、話を楚歌に戻しましょう。宿敵項羽を打ち破った劉邦は、秦の始皇帝の築いた版図をほぼ手中に収め、再び全土を統一し、国号を「漢」と称しました。漢はその後、前後400年にわたって繁栄した、中国の歴史上最も長い統一王朝となりましたが、その道のりは決して平坦なものではありませんでした。

「漢」といえば、後世、漢字、漢語、漢族などの語に見られるように、中国の民族と文化を代表するキーワードとして使われてきました。日本でも、和文に対

する漢文、和字（仮名）に対する漢字、和歌に対する漢詩、和魂に対する漢才のように、日本文化にとって先輩格の中国文化を客体化して表示するキーワードになっていますが、「漢」はもともと漢水の上流地域を指す地名にすぎませんでした。

『史記』には次のような記載があります。始皇帝の死後、秦王朝打倒の兵をあげた武将たちが楚の懷王のもとに集まって、最初に帝都咸陽に攻め入った武将を「関中の王」としようという盟約を定めました。「関中」とは函谷関の内側、つまり主都咸陽の周辺を指します。したがってこの地を支配することは中国全土を支配することにつながります。また、楚の懷王は、項羽が、滅亡した楚の王家の子孫を探し出し、「義帝」として担ぎあげた人物でした。いわば項羽のロボットです。屈原の時代に君臨した楚の懷王とはもちろん別人物です。しかしこの時、懷王が咸陽攻略を命じたのは粗暴な性格の項羽ではなく、温厚な性格の劉邦でした。主都咸陽はこの時すでに抵抗する力を失っていたので、劉邦は労することなく首都に入城しました。果して懷王の期待通り豪華な宮殿を傷つけることなく、文物財宝もそのまま温存し、民衆を煩雑な法網から解放したので、首都の住民から大歓迎を受けました。殺戮と迫害と略奪を禁じた、有名な「法三章」はこのとき劉邦が発したものです。これに怒った項羽は兵を進めて劉邦を追い詰め、殺害しようと謀りましたが、張良と樊噲の知略と機転によって劉邦は危うく難を逃れました。これが歴史上有名な「鴻門の会」です。このあと項羽は咸陽に入城し、王宮をことごとく焼きはらい、財物を奪い尽くし、大量に民衆を殺戮し、さらに、劉邦に咸陽攻略を命じた義帝をも殺しました。これがのちに、項羽討伐の大義名分を劉邦に与えることになったわけですが、この時項羽は、劉邦には漢の地を与えて漢王とし、廢墟と化した主都咸陽を棄てて去りました。漢の地は首都の南方ほど近い所がありますが、山中の辺鄙なところ。「関中の王」という約束は完全に反故にされたわけですが、ここで劉邦は兵力を立て直して逆襲に転じ、すでに民衆の支持を失った項羽を垓下に追い詰め、最後の勝利を得たのです。こういうわけで、「漢」の地は劉邦にとって屈辱の地であると同時に栄光の地ともなりました。

劉邦は屈辱から栄光に転じたこの地名を、のちに国号としたのでした。したがってもし劉邦が破れていたら、勝利しても、その前に項羽から屈辱を受けることがなかったとしたら、中国の民族と文化を代表するキーワードとしての「漢」の文字は今日この世に存在しなかったことになります。歴史に仮定法を持ち込むことは禁物とされていますが、それにしても偶然の積み重ねによる歴史の重みを感じさせられる話です。

そのことはさて置き、このようにして平民から身を起し、幾多の危機を乗り切り、奇跡的な勝利を収めた劉邦でしたが、勝利した後も、なお多くの問題を抱えていました。その一つは部下の離反でした。その最も大きなものは韓信の離反です。韓信はもと項羽の陣営に加わっていましたが、のちに離反して劉邦につき、劉邦の勝利に最も貢献した部将でした。「百万の軍を連ねて、戦えば必ず勝ち、攻むれば必ず取ること、吾、韓信に如かざるなり」と、劉邦をして言わしめたほどの人物でした。それだけに彼の武勇をねたむものも多く、何度も謀反の噂が立ちました。劉邦はそのつど彼を庇ってきましたが、最後は庇い切れず、平定せざるを得なくなりました。これには彼の武勇と、劉邦からの厚い信任を恐れた、劉邦の妻呂後の策謀が働いたと見られています。

韓信と同じく、項羽の陣営から劉邦側に寝返り、劉邦の勝利に大きく貢献した部将に黥布^{げいふ}という人物がいました。韓信の末路を知った彼は、累が自分に及ぶのを恐れ、先手を打って謀反を起こしますが、やがてこれも平定されます。

黥布の謀反を平定した後、劉邦は生まれ故郷の沛^{はい}に凱旋し、昔の仲間たちを集めて勝利を祝う大宴会を張りますが、このとき歌ったとされる「大風歌^{たいふうのうた}」が『史記』高祖本紀に採録されています。前置きが長くなりましたが、次にこれを採り上げてみましょう。

大風起兮雲飛揚 大風^{たいふう} 起って 雲^{ひよう} 飛揚す
威加海内兮歸故郷 威^いは海内^{かいだい}に加りて故郷^{くわ}に帰る

安得猛士兮守四方 ^{いづくん} 安んぞ猛士を得て四方を守らしめん

この歌にも各句の前半と後半の間に「兮^{けい}」の字が入っています。一句目は、三言一兮一三言で、「垓下歌」と同じですが、二句目と三句目は、四言一兮一三言、つまり、タン、タン、タン、タン、ハァ、タン、タン、タン、となっていて、句の前半が一字多くなっています。このような構成の詩句もやはり『楚辞』の中に見ることができます。したがってこれも楚歌の曲調に合わせて作られたものといふことができます。劉邦が兵士たちに敢えて歌わせた「楚歌」もこのようなりズムのものであったと想像されます。

さてそれではこの歌の意味を解釈してみましょう。「大風」は劉邦の軍勢、「雲」は敵方の軍勢を比喻しています。「威」は威光、ここでは劉邦自らの威光を意味しています。「海内」は国内という意味です。したがって最初の二句では、劉邦の軍勢が中国全土に旋風を巻き起こし、そのために敵の軍勢は雲のように飛び散り、その威光は全土におよび、今まさに故郷に凱旋したことを声高らかに歌い上げています。三句目の「安」は、いづくんぞ、または、いづくにか、と訓読します。一般にこの語は、どうしてそんなことがあり得ようか、という反語として使われることが多いのですが、ここでは、どうにかして、何とかして、という強い願望を表すという解釈が一般的です。「猛士」とは勇猛果敢な武将という意味です。「四方」は東西南北を指します。したがって「守四方」とは、東西南北のあらゆる外敵から国を守る、という意味です。

中華の地に支配権力を確立した歴代帝王の次の悩みは外敵の侵入、特にこの時代では匈奴の侵入をいかに防ぐかということでした。秦の始皇帝は万里の長城を築くことによってそれを実現しようとしたしましたが、必ずしも成功したとは言えません。外敵からの脅威は相変わらず続いていました。しかも始皇帝のような強大な権力を持たない劉邦にとっては、人材こそが頼りでした。「猛士を得て四方を守らしめん」とは、そのことを言っているものと思われます。かつて彼は、武勇では韓信、策謀では張良、物資調達では蕭何に敵わないが、そのような有能な人

材を使いこなせるのは自分しかいないと豪語したことがありますが、ここに始皇帝にも項羽にも見られなかった劉邦の新しい支配者像が表れていると見るができます。

しかしこれはあくまで文字面を見た上での解釈です。実際はどうだったのでしょうか。彼はこの時すでに晩年に達していて、病気がちの体でした。黥布討伐にも病を押して出陣しています。「猛士」といっても、最も頼りにしていた韓信には背かれ、今また黥布をも謀叛で失い、策士の張良もすでに年老い、心ひそかに隠遁生活を夢見ていました。かつては勇猛果敢であった部将たちも、あるものは背き、ある者は年老いていきます。自らの権威を保つために敢えて謀叛の罪を着せて葬った部将も数多くいました。このような状況を鑑みると、高祖劉邦の得意さ加減もかなり割引して考えなければならないかと思われれます。こう見てくると、どうにかして、という強い願望を表すとされる「安」の字の陰に、いったいどのようなしたらよいのか、という不安が見え隠れしているようにも思えるのです。

次に訳を付しておきましょう

[訳] 大いなる風の起こりて、雲飛び散れり。我が威光、天下におよび、いざ
ふるさと 故郷へ。願はくば、よき^{もののふ}武士を求め得て、いかで四方を守らしめん。

4 ^{こうこくのうた} 鴻鵠歌

劉邦はさらにもう一つ大きな問題を抱えていました。それは王位継承問題です。次にその点に触れてみましょう。

劉邦は、前にも申しましたように、もとはと言えば沛の地の平民でした。若い頃は仕事嫌いの大酒のみで、いつも街中を飲み歩いては酔いつぶれていました。ただ太っ腹で気前がいいので周囲の者からは一様に好かれていました。当時、沛には北方から移り住んでいた^{りょこう}呂公という名士がいました。人相見を得意としてい

た呂公は、劉邦の人相と人柄にほれ込み、将来の出世を見込んで、自分の娘をこれに^{めあ}妻わせました。これがのちに高祖劉邦の皇后となる^{りょこう}呂后です。呂后は男勝りの勝気な女性で、父親と共に、無一文から出発した劉邦の偉業のために力を尽くしました。この親娘の援助がなければ、おそらく劉邦の出世もなかったことでしょう。そういうわけで高祖劉邦はこの妻には一生頭が上がらない状態でした。勝ち気な性格の呂后は年とともに政治に口出しすることが多くなり、さすがの高祖劉邦もこれを次第に疎んじるようになりました。韓信をはじめ、功績ある多くの部将を謀叛に追いやったのも、その多くはこの呂後の策謀であったと伝えられています。

この二人の間には^{えい}盈という名の太子がいました。後に二代皇帝^{けいてい}恵帝となる人物です。そのころ、高祖には^{せき}戚という愛妾がいて、彼は常にこの戚夫人と行動を共にしていました。戚夫人との間には如意という名の男児がいて、趙王に封ぜられていました。戚夫人は呂後の生んだ盈を廃して如意を皇太子にするよう、事あるごとに高祖に泣いて訴えます。こうしなければ、高祖亡き後の自分たち母子二人の運命がどうなるかを知り尽くしていたからです。高祖もかねてより、盈が文弱で優しすぎるため王位継承者として相応しくないと考えていたので、これを口実にして戚夫人の願いを聞き入れようとしてしました。日頃から戚夫人に対して恨み骨髄であった呂后にとって、これはただ事ではありません。彼女は早速、もともと太子交代に異論を唱えていた張良と謀り、高祖が秘かに尊敬していた^{とうえんこう}東園公、^{ろく}甬里先生、^{きりき}綺里季、^{かこうこう}夏黄公という四人の隠者を補佐役に立てました。こうすることによって高祖から太子交代の口実を奪ったわけです。このとき高祖が戚夫人に対して言った言葉が、「我が為に^{そぶ}楚舞せよ。吾^{なんじ} 若^{そか}が為に楚歌せん」、つまり、わたしのために^{そぶ}楚舞を舞ってくれ、お前のために楚歌を歌ってあげるから、と言って夫人を慰めたというのです。まるで「星影のワルツ」を思わせるような悲しい話ですね。

このとき高祖が歌ったという歌が『史記』留公世家に採録され、後世、

こくこくのうた
鴻鵠歌として語り継がれています。

鴻鵠高飛	こくこく 高く 飛び
一舉千里	一挙に 千里
羽翼已就	すで な 已に就りて
四海横絶	わうぜつ 四海を横絶す
四海横絶	四海を横絶す
又可奈何	い かん 又 奈何すべき
雖有繒繳	そうしゃく いえど 繒繳 有りと雖も
將安所施	はた いづく ほどこ 將 安んぞ施す所あらん

「鴻鵠」とは大きな鳥という意味です。多くの場合大人物に喩えられます。最初に秦王朝打倒の兵を挙げた陳勝が「燕雀 焉んぞ鴻鵠の 志 を知らんや」、(『史記』陳勝世家) ちっぽけな鳥どもに大きな鳥の志がわかるものか、と言った言葉は有名ですが、これと同じ意味です。ここでは、すでに強力な補佐役を得た太子のことを指しています。「羽翼已就」とは、王位継承の体制がすでに整ったことを暗示しています。「四海横絶」とは、全国を自由に飛び回ることです。これも太子の体制が確立したことを暗示しています。「又可奈何」は、もうどうすることもできない、という意味です。「繒繳」とは、糸をつけて鳥を射落とす弓矢のことです。「將安所施」は、もはや手の施しようがない、という意味です。

[訳] 彼の鴻鵠は高く飛び、千里の彼方を天翔ける、羽翼はすでに備はりて、いまや四海に羽ばたけり。いまや四海に羽ばたけり。さても彼をば如何にせん。たとひ弓矢の有りととも、射止むるすべのなかりしを。

帝都咸陽を攻略し、ライバルの項羽に打ち勝ち、刃むかう部将をすべて誅殺し、

盤石の体制を確立したはずの高祖劉邦でしたが、猛妻呂后に対しては手も足も出なかったわけです。案の定、高祖亡き後の戚夫人の運命は、実に無残なものでした。趙王如意は毒殺され、戚夫人は目をくり抜かれ、手足を切り落とされ、厠のわきに打ち棄てられました。そして呂后が、側を通る人々に「人^{ひと}彘^{ぶた}」と呼ばせたことは歴史上有名な話です。

さてこの歌ですが、これには楚歌を特徴づける「兮」の字がありません。しかも一句がタン、タン、タン、タンの四言で構成されています。字面だけからみれば『詩経』にも似ていますが、『詩経』の曲調はこの時期すでに廃れていました。文献的にも、始皇帝の焚書坑儒によって焼き払われた後でした。『詩経』が文献として復活するのは少なくとも高祖の孫に当たる景帝の時代以後のことです。仮に文献が一部残っていたとしても、学問のない平民上がりの高祖に読めるわけはありません。高祖は常日頃から口ずさんでいた楚歌の曲調に乗せてこの歌を歌ったものと思われます。このことはまた、楚歌がこの時すでに中国全土に幅広く流行していたことをも表しています。

ところで、句の中間に「兮」の字があるのが楚歌の特徴だと前に申しましたが、『楚辞』の中にも「兮」の字のない四言のリズムを持つ詩句がないわけではありません。例えば、『楚辞』の中に「天問」と題する詩篇があります。これは屈原が放逐されたあと、放浪の際に訪れた廟やお堂に描かれた山川草木、神霊怪奇の画像を眺めながら、天地創造に関する疑問を壁に書き付けたと伝えられているものですが、この詩篇には「兮」の字はなく、しかもほとんどすべてが四字句で構成されています。このことを考えると、楚歌の中にもこのようなりズムの詩篇があっても不思議ではありません。このことから、楚歌という文芸ジャンルの持つ多様な姿を窺い知ることができます。

5 むすび

今回は、楚歌と思われる詩篇を『史記』の中から拾い上げてお話してきましたが、『詩経』や『楚辞』と違って、楚歌には詩集としてまとまったものはありません。各種の文献の中に紛れ込んだものがあるだけです。その中から、これが楚歌だと確実に判定できるものを探し出すのは容易なことではありませんが、今回は『楚辞』に見られる多様な詩形と対照してみて、明らかに楚歌と判断できるものを二、三選んでお話しさせていただきました。

このほか、『論語』微子篇には「接輿歌^{せつよのうた}」というのがあり、これと同じものが『史記』孔子世家にも採録されています。これと似かよったものは『莊子』人間世にもあります。また『孟子』離婁章句上^{りろうしょうく}には「孺子歌^{じゆしのうた}」というのがあります。これらは明らかに楚歌と断定できるものです。特に『孟子』の「孺子歌」は『楚辞』魚父^{ぎよほ}にそのままの形で出てきます。しかしこれらを採り上げだすと時間がいくらあっても足りませんので、今回は割愛させていただきました。今回の講座では、楚歌の鑑賞もさることながら、楚歌を通じて、中国の歴史と、その中を生き抜いた人々の人物像に接するきっかけの一つにもなれればと願っております。

長時間ご清聴ありがとうございました。謝謝。

(2006年10月、相模原市民大学での講義録をもとに加筆修正)